

マルクスが述べたマルクスの功績

三 1852年におけるマルクスの問題提起

1907年に、メーリングは『ノイエ・ツァイト』誌(第25巻、第二冊、164ページ)に、1852年三月五日にマルクスからワイデマイヤーへあてた手紙の抜粋を発表した。この手紙には、とりわけ、つぎのような注目すべき考察がふくまれている。

「私について言えば、近代社会に諸階級が存在していることを発見したという功績も、それらの階級相互の闘争を発見したという功績も、私のものではない。私よりもずっとまえに、ブルジョア的編史家たちが諸階級のこの闘争の歴史的発展を述べていたし、ブルジョア経済学者たちは諸階級の経済的解剖学を述べていた。私があたらしくやったことは、つぎの点を証明したことである。(一) 階級の存在は、生産の特定の歴史的発展段階(historische Entwicklungsphasen der Produktion)だけにむすびついたものであるということ、(二) 階級闘争は、必然的にプロレタリアートの独裁に導くということ、(三) この独裁そのものは、いっさいの階級の廃絶と無階級社会とにいたる過渡をなすにすぎないということ、これである」〔第五巻、488ページ〕。

以上の言葉で、マルクスは、第一には、ブルジョアジーのもっとも深い考えをもったすんだ思想家の学説と彼の学説との主要な、根本的な相違を、第二には、彼の国家学説の本質を、驚くほどあざやかに表現することができた。

マルクスの学説の主要なものは階級闘争である。非常にしばしば、人々は、こうかたり、またこう言っている。だがこれは誤っている。そして、この誤りの結果として、マルクス主義を日和見主義に歪曲し、マルクス主義をブルジョアジーにうけいられるように偽造することが、いたるところで生じている。なぜなら、階級闘争の学説は、マルクスではなく、マルクス以前にブルジョアジーが創出したものであって、一般的に言えば、ブルジョアジーにうけいられるものだからである。階級闘争を承認するにすぎないものは、まだマルクス主義者ではない。そういう人はブルジョア的な思考とブルジョア政治とのわくをまだ出していないこともありうる。マルクス主義を階級闘争の学説にかざることは、マルクス主義を切りちぢめ、歪曲し、それをブルジョアジーにもうけいられるものにひきさげることの意味する。階級闘争の承認をプロレタリアートの独裁の承認に拡張する人だけが、マルクス主義者である。この点に、マルクス主義者と月なみな小ブルジョア(ならびに大ブルジョア)とのもっとも深刻な相違がある。この試金石で、マルクス主義をほんとうに理解し承認しているかどうかをためさなければならない。……

もとマルクス主義者K・カウツキーを主要な代表者とする今日の日和見主義は、前掲のマルクスの行ったブルジョア的立場の特徴づけに、そっくりあてはまる。なぜなら、この日和見主義は、階級闘争の承認をブルジョア的諸関係の範囲にかざるからである(ところで、この範囲内では、この範囲のわく内では、教養ある自由主義者はだれも、階級闘争を「原則的に」承認することをこばまないだろう!)。日和見主義は、階級闘争の承認を、まさに、最重要な点までは、すなわち資本主義から共産主義への移行の時期、ブルジョアジーを打倒し、彼らを完全に絶滅する時期までは、おしひろげない。現実には、その時期は、不可避免的に、未曾有に激しい階級闘争の時期であり、未曾有に鋭い形をとった階級闘

争の時期である。したがって、この時期の国家もまた、不可避免的に**新しい型**の民主主義的な（プロレタリアと無産者一般にとっては）、また**新しい型**の独裁的な（ブルジョアジーにたいしては）国家でなければならない。

さらに、マルクスの国家学説の本質は、一階級の独裁が、あらゆる階級社会一般にだけ必要なのではなく、またブルジョアジーをうちたおした**プロレタリアート**にだけ必要なのではなく、さらに、資本主義と「無階級社会」、共産主義とをへだてる**歴史的時期**全体にも、必要なことを理解した人によってだけ、会得された。ブルジョア国家の形態は多種多様であるが、その本質は一つである。これらの国家はみな、形態はどうであろうとも、結局のところ、かならず**ブルジョアジーの独裁**なのである。資本主義から共産主義への移行は、もちろん、きわめて多数の多種多様な政治形態をもたらさざるをえないが、しかしそのさい、本質は不可避免的にただ一つ、**プロレタリアート**の独裁であろう。※……………は青山の略

第25巻 P443~445 『国家と革命』 1917年8~9月に執筆

ポイント

- (一) 階級の存在は、生産の特定の歴史的発展段階だけにむすびついたものである
- (二) 階級闘争は、必然的にプロレタリアートの独裁に導く
- (三) この独裁そのものは、いっさいの階級の廃絶と無階級社会とにいたる過渡をなすにすぎない

ブルジョア国家の形態は多種多様であるが、その本質は、かならずブルジョアジーの独裁なのであり、資本主義から共産主義への移行は、もちろん、きわめて多数の多種多様な政治形態をもたらさざるをえないが、しかし、本質は不可避免的に、プロレタリアートの独裁である。

参考 第39巻ノート〈マルクス主義と帝国主義について〉P624 1915 - 1916年執筆

「くさて私自身について言えば、近代社会に諸階級が存在していることを発見したという功績も、それらの階級相互の闘争を発見したという功績も、私のものではない。私よりもずっとまえに、ブルジョア的編史家たちが諸階級のこの闘争の歴史的発展を述べていたし、ブルジョア経済学者たちは諸階級の経済的解剖学を述べていた。私があたらしくやったことは、つぎの点を証明したことである。(一) 階級の存在は、生産の特定の歴史的発展段階 (historische Entwicklungsphasen der Produktion) だけにむすびつくものであるということ、(二) 階級闘争は、必然的にプロレタリアートの独裁に導くということ、(三) この独裁そのものは、いっさいの階級の廃絶と無階級社会とにいたる過渡をなすにすぎないということ、これである。ハインツェンのように諸階級の闘争ばかりか階級そのものの存在さえ否認している無知な連中は、どんなに大げさな人道主義の血の出るような叫び声をあげようとも、ブルジョアジーの支配する社会的諸条件を、歴史の究極の産物、最上のものと考えていること、彼らはブルジョアジーの奴僕にすぎないことを証明しているだけである。しかもこれらの連中は、ブルジョア体制そのものの偉大さと一時的必然性さえほとんど理解していないのだから、彼らの奴僕根性はますますもって胸が悪くなる)** (164 - 165 ページ). **大月書店版《マルクス=エンゲルス選集》第7巻 P44-45を参照